全国まなべ会会報

編集と発行　全国まなべ会広報部　事務所

〒764-0023　香川県多度津町若葉町9-13
TEL＆FAX　0877(33)4512

令和７年５月24日(土)～25日(日)　リーガロイヤルホテル新居浜　にて

はじめに

第42回全国まなべ会の伊予新居浜大会は当地新居浜の「リーガロイヤルホテル新居浜」で盛大に開催された。

今大会の直前には第十代会長である**真鍋梅美**さんが二月に急逝され、会長不在の大会となった。このため今回の「副会長役員会」においては、新会長の選任並びに来年度の全国大会開催地設定が大きな議題となった。

まず開催地の選定にあたり、まず新会長の選任が前提であり新会長の体制下で次年度の開催地選定を図るのが通例であるのではと、特別顧問の**真鍋光廣**氏から提言を頂いた。そこで参加役員全員の賛同を得て全国まなべ会新会長と、次年度の全国大会開催地を内定することができた。

皆様ご存知のとおり、国内において昨年からコメ不足が予想されていて、このところ米の販売価格の高騰や、また国外においては第二次トランプ政権の関税賦課手法による問題惹起により、国際間の不安定性を誘発させるという現況に至っている。

また国際政治の関連においても、「ウクライナ戦争」や中東での「イスラエルによるガザ制圧」という度の過ぎた戦争は、仲介国の積極的介入もままならず、かえって悲惨な泥沼状況になっている。覇権国家がこれほどまでに国連機構の機能低下を図れば地球の民びとは、物心ともども破壊されてゆくのではなかろうか。

このような現状に対峙した時代に入って、一体全体、日本国の為政者たちはどういう行動理念をもって関与してゆくのであろうか。自然との共生を第一義とする日本国の積極的な仲介外交活動があっても良いのではなかろうか。

このところ国内外における多難な国際状況の推移や、地球温暖化による自然環境の悪化と災害発生の推移を観察すれば、これは人間の行動によるものが大きいといえるのではなかろうか。「自然を汚せば自然から大きなしっぺ返しを受ける」のである。

諸々目にする現象の本質を見極めるには、山田方谷先生が言われる「事の外」という大局観が重要であると考える。地球環境の保全目的のためには、大国の自国第一主義孤立主義からの脱却や、覇権主義の束縛からの解放を進めるべきである。地球は燃え出している。各国為政者たちは己の利益誘導ではなく、自国民の幸せや他国との共存体制づくりに邁進してもらいたいものである。

今までの経済は物欲主体を中心にしていたものであるが、各国内の安心・安全生活の樹立というソフト面での施策も重要になってくるであろう。今の地球の現状を直視すれば国際協調がいかに重要になっているのかが分かる。各国リーダーたちの強欲の達成ために地球を独占開発をしてはならないのである。　國六　記

新会長就任のご挨拶

全国まなべ会会長
真鍋　隆氏

今回の第42回新居浜大会において皆様のご推挙を頂き全国まなべ会々長に就任することになりました。思いますに、昨今国内外とも多難な時期に遭遇しておりますが、この局面において大役を仰せつけられましたこと、大変プレッシャーを感じております。さりながら、伝統ある全国まなべ会組織の維持発展のためには、誠意をもって尽力することこそが皆様方への務めと感じ、会員共々一緒になって事業活動を進めて参りたいと存じます。

ところで当会が直面している問題でありますが、ご承知の通り社会においては高齢化が進んでおり、おまけに少子化とともに人口減の社会になってきました。当会においてもこのところ会員減少の状況に立ち至っておりますが、家庭の実態を見ましても次世帯の子供との同居は大変珍しい状況であります。従って後継者の会員補充は難しいものがあります。この**継承者の保持問題**がまず第一点であります。次には時代の変化であります。過去のようにゆったりとした時代から変転極まりない時代になっていることであります。従って過去の歴史を真摯に学ぼうとする時間環境の設定が困難なことであります。そして地域社会との接点との確立であり、**地域社会の発展と参画に関心**を寄せることであります。これが第二点の問題点でありましょう。

考えてみれば歴史は過去を洞察し、未来への行動羅針盤といえる記録でもあります。すばらしい組織体においては、記録を後世に残しているのではないでしょうか。この記録を糧として将来への行動指針と事前の危機管理が可能と考えております。

わたしどもの同族組織体は、現に全国的にも活動している稀有な会であります。今後とも同族の行動形態のみならず、社会の未来動向にも関心をもって共に進んでまいりたいと存じます。よろしくご指導ご鞭撻をお願いいたします。併せて皆様方のご健勝とご多幸を祈念しまして新任の挨拶に代えさせていただきます。　不一

第四十二回伊予浜大会の報告

全国大会は、今回の伊予新居浜の開催で四十二回目になりました。この間には、例のコロナ感染の影響により都合三回分の全国総会が開催出来なかった。

考えますと、人は成人してから約三〇年で一世代の交代となりますし、また、新製品を作り出してから約三〇年が経過すると、商品サイクルの転換期を迎えるようになるのではないでしょうか。

さすればわたし達同族の「まなべ会」の活動は四十五年の長きにわたる活動を重ねてきました。従って人間組織的には長寿の領域に立ち至っていることが分かります。組織長寿の原因は、先輩諸氏の熱意と情熱という良き栄養源が補給されてきたものと考えます。しかし多年にわたる時間経過とともに組織細胞が劣化してきており、このところ会員数の減少傾向が観られるようになってきました。

かような環境下に関わらず、全国大会が開催されてきました。担当地区の負担は重い状況にもなっております。社会環境の変化に影響されているわたし達組織も例外ではなく、年一回の大会を持ち回りにて開催する困難さに直面しているのが現状です。

さて大会の総会開始前には「全国副会長会」を開催しています。現在組織が直面している諸問題は多くありますが、時間制限の下で次の議題が提案されました。

（全国副会長会）
①次期全国会長の選任
②全国大会の次年度開催地選定
③継志館員の一般会員への移行
④全国まなべ会活動の継承と全国大会開催の形態変更問題
⑤その他・・・であります。

全国新会長の隆さま

第一の案件については次期会長には岡山の会長をされている「**真鍋　隆**」氏が満場一致により選任されました。

第二の来年度の全国開催地は埼玉地区で開催されることになりましたが、**眞鍋　透**会長を中心に関東地区の一環として開催実行することに決定しました。

第三の件は、継志館員は次世代の継承者であるため、この機会に一般正式会員に移行していただき、会員数として加算いただく。

第四の組織運営形態や大会運営の仕様については、従来の形式にとらわれずに、フラットな組織や運営を図ってそれぞれ会員方々の意志や意見を取り上げ自由で闊達な組織運営を推進していくものとしたい。

第五のその他の問題点としては、

・郵便局の郵送料の値上げ問題は大きく、各地への補助金増強問題があります。

・また会報誌発行問題、ＳＮＳなどの対外ＰＲの機能強化を図る広報活動などの推進などでありますが、追々執行部役員で素案を作成する方針です。

（総会での会計決算議決）

組織活動の上で収支勘定の確定数字を毎年期末の3月31日を基準として決算報告書を監査役に提出している。ただ当会の場合は収益勘定のみであり、総勘定決算書は作成していない。

当まなべ会は収益のみの単年度決算であるため、このところの収支はマイナス計上が通例化している。その原因は、ご承知のごとく毎年会費収入が減少していることです。これの解消のためには会員増強化をはかるか、または寄付金の提供による資金確保であります。会の運営費は、ほぼ固定費でありますから現状では損益分岐点は高くなっております。会員の増強が困難であれば、勢い寄付金確保の道か、はたまた会報誌の無発行などの事業縮小を選択することになります。

しかしながら、当会においては剰余金（繰り越し）がまま有りますので現状は問題なきものと考えます。当会設立後45周年を経過しておりますが、あと5年で創設50周年を迎えることになりますが、そろそろこの記念年月にどのように対処するのかが問われることになります。

さて令和6年度の一般会計並びに特別勘定決算について別紙のとおり報告いたします。なお令和7年度の一般会計予算案を併せて列記いたしますのでご高覧ください。

（各賞受賞者）

栄誉賞　なし
功労賞　なし
感謝状　なし
長寿賞　兵庫　**眞鍋誠次**氏
　　讃岐　**眞鍋壽利**氏
　　伊予　**眞鍋憲夫**氏
　　福岡　**眞部利應**氏

（懇親会での交流）

総会が終了してから休憩時間の前に、参加いただいた方々の参加記念のため集合写真の撮影を恒例としている。記念写真の後は懇親会開始まで自由時間なので入浴したり、ロビーで旧交を温めしたりしていた。いよいよ懇親会の始まりである。伊予会長**敏朗**さんの歓迎挨拶と讃岐会長の**晴夫**さんによるご先祖への献杯儀礼とわたしどもの健勝と活躍を祈念して乾杯の盃を挙げた。

紀州白浜地区の皆さん

祝宴も進むにつれて、常日頃から喉の鍛錬をされている方々の歌謡曲の演出がありました。

近江の**光子**さんの「夫婦坂」や同じく、**木村百合子**さんの「白い海峡」、大阪の**真鍋厚吉**さんの「祝いしぐれ」や紀州白浜からはプロ級の人たちのご披露がありました。また神奈川からは、今年早々に黄泉の国へ旅立たれた**藤正**さんのひ孫さんによる可愛い歌声を聞かせていただきました。さぞ「おじいちゃま」も、否「おばあちゃま」にもきっと、美声が届いているでしょうね。歌っている方への素敵な（？）伴奏もあり、宴は最高潮に達しました。時の刻みを止めたくもありますが、終章の幕が近づいて参りました。最後に各地区の紹介があり、そして来年開催の関東地区の埼玉**透**会長へ伊予から全国まなべ会の会旗が手渡されました。

関東地区の皆さん

神奈川地区の皆さん

藤正さんのひ孫3人組出演

埼玉透会長へ旗の引継ぎ

今年開催の伊予まなべ会に感謝を申し上げるとともに、来年関東地区開催の成功を祈念して総会の概要報告とさせていただきます。

國六　記

（翌日観光の報告）

今回の翌日観光は、新居浜市、四国中央市に存在する史跡を中心に見学しました。特にこの地域は「まなべ」姓の方が多い地区であり、最近ではノーベル物理学を受賞された**真鍋叔郎**博士は四国中央市新宮のご出身である。

翌日観光の行程は朝9時に宿泊のリーガロイヤルホテルを出発して、まず天正の陣で亡くなった人たちを弔っている慈眼寺を訪ねた。ここでは、僧侶の読経の下に、戦国大名の金子元宅と真鍋六人衆の墓に線香を手向けて霊を慰めたのであった。またここには東京の**真鍋尚孝**さんのご先祖の位牌などを収めているお堂が建立されているのを教えられた。また立派な二基のお墓も大きな敷地の中に設置されていた。

真鍋六人衆の墓

次の訪問地先は千足神社である。この神社のご先祖が一弦琴の作曲・奏者で有名な**真鍋豊平翁**である。かつて讃岐まなべ会で神戸の須磨寺へ行ったことがあるが、そこで一弦琴の調べを初めて聴いたことがある。今回参拝した千足神社の社殿で、地元有志お三方の演奏をお聴きしたので大変懐かしいものであった。一弦琴の調べは大変寂寥感があるが、昔の武士の戦いから派生した悲しい歴史の調べでもある。

この後、昼の一服休憩の昼食時間となり、新居浜市内で摂ることになった。和風割烹の「平八」で一服する。畳しつらえの部屋はやはり落ち着くものである。今治の来島海峡の急流に揉まれた「桜鯛」の身は引き締まっており、やはり本場で食する鯛の味は格別であった。ここで、それぞれ一服歓談して次の史跡巡りに元気をもらうことになった。

昼からの見学先は別子銅山記念館である。住友関連の中心となる「住友金属鉱山」の過去から廃坑に至るまでの歴史変遷を詳細に説明書されている歴史会館である。些か照明が暗く把握出来ないところがあったのが残念であった。しかし鉱石の現物も展示されていて、金と銅の隣り合わせの合体物かが鉱石となっている事実を教えられた。鉱山学の面白さを認識したのである。

別子銅山記念館

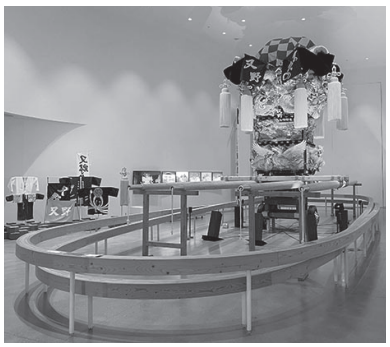
真鍋豊平翁家の墓所

ここを見学してからは、車は山裾の道を東へ東へと進んで行った。次は先刻参拝した千足神社の神主と関わりのある**真鍋豊平翁**のご先祖の墓の墓参である。ここへは新居浜市からはかなり東にあるところである。南の側の山裾を通りながら車は坂を行きつくところまで登って行った。車を降りてからは少し上り坂を歩いて行った。そこには一弦琴演奏曲の著名作家である**真鍋豊平翁**家の墓所が私達を迎えてくれた。綺麗に整備されていて参加者一同参拝の挨拶をさせていただいた。千足神社の神主をされていたご先祖様たちとの初対面であった。

この地を退去して史跡探訪は最終章に入ってきた。また西へひき返すことになった。最後の研修見学先はＪＲ新居浜駅の近くにある「あかがねミュージアム」である。

千足神社

あかがねミュージアム


新居浜太鼓

この建物は、流線型のカーブに合わせて銅版が張られていて、新居浜太鼓の現物が展示されている。太鼓台の雄姿がパノラマ動画で鑑賞出来ました。秋には一堂に会して担ぎ比べされる現場・現物を秋の本番に見たいものである。

歴史と産業の両面で、実地に研修旅行の機会を得て大いに勉強させていただきました。伊予まなべ会の皆様に厚くお礼を申しあげてつたない報告とさせていただきます。

國六　記

（追記）

地球の深部から地表近くに押し出されてくるマグマの地球内部活動に驚嘆するのである。鹿児島錦江湾の海中には金を多く含有する岩石が存在するようである。火山大国の日本では多くの鉱物岩石が地表近くに押しされてきている。その中には銅や金などの塊が一緒に含有されている。鹿児島県には住友金属鉱山が「菱刈鉱山」を持っている。この鉱山の金含有率の高さはとても有名である。またこの地の錦江湾の海中には金を多く含む金塊鉱石が豊富に存在している。海中を汚濁させずに岩石を発掘出来る方策が考えられれば、日本は金保有の一等国になるのではなかろうか。

藤正さんのひ孫3人組
大会の華たち!!

住友財閥の基礎を創った新居浜の別子銅山

戦前日本の大きな三大財閥の一つである住友財閥の基礎となる出発地点は、四国新居浜の別子銅山の成功であった。ここに至るまでには、大変な紆余曲折の歴史があったことである。四国という小さな島で、しかも急峻な山並みの中に大きな財宝を見つけたのであるが、鉱山開発という危険な作業と環境との隣り合わせの事業遂行である。住友財閥の中核事業となった別子銅山の遍歴を少し辿ってみることにしたい。

ここに至る前には、別子の北側には立川村があったのであるが、そこには後述のとおり立川銅山の歴史があった。

（立川銅山の成り立ち）

物語は立川村での銅山開発にまで遡るのである。さて江戸時代の徳川三代将軍家光のころである。新居郡立川村に角兵衛と呼ぶ炭焼きの男がいた。角兵衛は、立川村の奥深く入り込んで炭焼きの窯を造るために石を探していた。その時に光る石を三個拾い上げた。珍しい石であったため、立川村の庄屋の神野氏に進上しようと考えたのである。夕食後庄屋さんを訪ねて訳を話して石を進上した。庄屋は石をその後床の間に飾っていた。

その後大坂から行商人が庄屋の家にやってきたが、彼は庄屋の床に飾っている石を発見した。彼は早速その石が銅の鉱石であることを知ったのである。さすがに利に敏い大阪商人である。「これは大した代物」と考え、早速庄屋に交渉して一個をもらい受けることにした。大坂の商人は帰坂後、直ちに専門家の鑑定を受けたが、その結果、品位の相当高い銅の鉱石であることが判明した。

大坂商人は胸の高鳴りから三か月が経過した頃の初秋に、沢山の土産物を携えて再び立川村の庄屋神野氏の家を訪ねた。神野氏と商人の話は進み、鉱石発見者の角兵衛を庄屋宅へ呼んでその当時の状況をつぶさに聴取した。その話から大坂商人と庄屋の神野氏は大きな希望を持つことになる。早速、翌日には角兵衛を案内役として山を実地調査することになった。

別子銅山跡

実査の当日には昼、午後二時ごろには当地の大平辺りで大きな露頭を発見したり、立派な鉱石を採取したりしている。その夜は大坂の商人と庄屋の神野氏の二人は採掘の方法を考えていた。大坂商人には西条藩の領地に友人がいたのである。戸左衛門という友である。三人協議の結果、資本金は大坂商人が出資して、経営の方は庄屋の神野藤兵衛、戸左衛門、そして大坂商人三人の共同経営の形態をとることになった。そして西条藩の許可を得て採掘に着手することになる。この三人による立川での採掘事業がそもそも立川銅山の最初の事業活動となったのである。

この三者による銅山経営は不慣れであり、予想以上の困難な状況に遭遇することになる。数年にならずして財政困窮になり、間もなく土佐の寺西喜助なる人物に譲り渡すことになる。しかし寺西喜助も持ちおおせずに、また紀州の熊野屋彦四郎に譲渡する。しかし更にまた大坂屋吉兵衛に移されることになる。そして最終的には元禄五年になって金子村の真鍋弥一右衛門と立川村の神野氏（藤兵衛）が共同経営することになる。

このように立川銅山は早くから開坑されているが、経営者が次々と変わったために、設備の充実を図る暇もなかった。水抜きも不完全であったようで、経営は益々困難を極めるばかりであった。このような状況の中で住友の泉屋がここに登場してくるのである。

（住友泉屋と別子との関り）

通説によれば。元禄三年（１６９０）の秋、和泉屋の住友家が経営する吉岡銅山（岡山県高梁市）にいた手代の田向重右衛門が、四国の立川銅山に勤めていた坑夫の切上がり長兵衛からの知らせによって、立川銅山と隣り合った別子銅山を発見したことになっている。そこで吉岡銅山に見切りをつけて新居浜の別子村の山にある別子銅山に移って来たことが転機になっている。

当事者の田向が享保九年（１７２４）に記した「別子銅山初発之書付」には長兵衛は登場していないのが不思議であるが、岡山の吉岡銅山からここ新居浜の別子村に来て銅の含有率のよい鉱脈を発見したことは事実である。これまで吉岡銅山で操業していたが効率が悪くなって、含有率の高い新規銅山を物色していたことは事実であろう。

この別子銅山の銅含有率は高く、その後の住友発展の基盤となる住友金属工業となるのである。この備中成羽の吉岡から新居浜の別子銅山への移行については、後記の全国まなべ会会報誌に記述しているので再読ください。

なお、この住友泉屋の新居浜別子への事業移行から、立川銅山と別子銅山との命運が分かれることになる。別子の方は徳川幕府直轄地の保護領域となり、これまでの泉屋の過去の事業実績がものをいうことになるのである。

＊参考資料
・別子銅山
　新居浜観光協会発行
・新居浜市の歴史　新居浜市
・全国まなべ会会報第47号
・京極（令和特別号）新居浜の銅山経営

新居浜大会と梅美前会長の思い出

東京まなべ会　事務局長　**真鍋美紀**

令和七年二月二十二日に前全国会長の**真鍋梅美**会長が天国に旅立たれました。この五月の新居浜大会を心より楽しみにされ、**澄夫**事務局長さんから企画書を頂き、彼女が念願していたコースであったと聞いておりました。

想いおこすと、関東地区の集まりでは**梅美**さんは皆を取り纏めてくださり、今回の新居浜関係のお話は特に何度もお聞きしておりました。それは**真鍋八千代**様、初代会長の**藤治**様にご縁のある「千足神社」のお話であったり、昔、慈眼寺での参拝時には「孫太郎」の幽霊にお逢いしたとのお話でもありました。いかにも面白く「真鍋の歴史」も教えて下さいました。

また岡山大会での会長ご就任時の挨拶の際には、「**真鍋一族は義理を大切にする一族**」であると話され、まさに士族に相応しい美しい武士のようなお方だったと想い起こします。

ところで彼女とのお別れの葬儀において、彼女のお兄様から「梅の蕾の頃産まれましたので、梅の花を見たら想い出してください」とお礼を述べられました。またお姉様からは「**梅美**の分まで皆様、健康第一に長生きしてください」、と参列者の方々にお言葉を頂きました。

今回の新居浜大会で、岡山の**隆**会長が全国の会長に新しく就任されることになりましたが、この事を**梅美**前会長はとても嬉しく喜んでいることと想います。また全国まなべ会活動と皆様との交歓が彼女にとってとても生き甲斐だったと申されていた言葉に感涙を禁じえませんでした。

ここに彼女との交流の一端を述べさせていただき、楽しかった思い出に浸りながら彼女から頂いた愛情に対しお礼を申し上げ、安らかなご休息を祈念申し上げます。　不一

梅美さまと真鍋島八幡神社にて

各地からのお便り

岡山から

会員の**直己**さんから、今まで幾たびも「西行法師」の歌を編集され解説つきの綴り冊子をわたしに贈呈されてきた。よく研究されており、西行法師の行歴がよく判るのであった。今回送付されたのは「歌（二）」であるが、今回の内容は石川啄木の歌であった。

東海の　小島の磯の　白砂に
われ泣きぬれて　蟹とたわむる

という歌が時の歌集「一握の砂」の第一首になっている、と紹介されている。筆者もこの歌が有名なことは既に知っていたのであるが、最後の「蟹」に至るまでには、海→島→砂浜→人→蟹へとズームアップしているとのことであった。**直己**さんの解説により、歌の本質を理解できるものであった。物事の本質を探究する姿勢の大切さを**直己**さんから教えられるものでした。

大阪から

懐かしい写真が大阪の**真鍋厚吉**さんからから送られてきた。昭和58年5月8日「三井アーバンホテル大阪」で開催された大阪まなべ会の結成大会記念の集合写真である。

男子27名、女子7名の参加を得て、盛大に催行されたことが想像される雰囲気の写真であった。初代会長の**藤治**さん、阿波の**五郎**会長さん、昨年逝去された**梅美**会長さんも参加されている。この集合写真を送付いただいた**厚吉**さんも三段目の中央辺りに若かりし日の面影を鮮明に映し出しているのである。大変懐かしいものであり、大阪まなべ会の隆盛を予感させる歴史資産である。

ところで、**厚吉**さんはわたしの五年先輩であるから今年は九十一歳になるのではなかろうか。足は少し不自由な様子であったが、頭脳や精神の心意気は私より旺盛であり、今回、伊予新居浜大会に参加いただいたこと誠に感謝申し上げます。

伊予から

このところ愛媛県の新聞などに掲載されている記事には、戦時中の海軍戦闘機であった「紫電改」のニュースが散見された。先の大戦で日本軍は敗色が濃くなってきて、特攻機による攻撃を考案実行する挙に出ることになった。伊予西条市にある樽本神社には神風特別攻撃隊敷島隊員五人の慰霊碑があり、隊長の関行男は西条市大町出身である。

ところで南予の御荘湾の海底で紫電改が発見されたのは海軍の松山基地から飛び立った戦闘機である。この海面不時着に際して通信傍受していた鹿屋基地の通信使を知っている。この飛行機は、今回発見される前に一度漁師の網にかかり引き上げられたが、貝殻などの不純物に覆われて物体の形態が不明のため海に投棄されていたらしい。そのため二回目の網に掛かった時に飛行機の機体のようであると大騒動したのである。その時の鹿屋海軍基地の司令官だった方に状況を聞き出して、やっと概要が判明したのである。その通信使は、当時鹿屋海軍司令の副官助手をしていたが、機体不時着当時には通信業務していて、紫電改飛行士から通信を傍受していたことである。当時の司令官からの要請により愛南町へ赴き事の次第を説明したのである。この時にはテレビなどのマスコミの取材もあり大変だったようである。この時には通信使の妹がテレビを見ていて「説明している人はどうも私の兄であるようだ。里へ電話して調べてほしい」という電話が私にかかってきたことから電話すると仁尾の兄さんであることが判明した。

地元愛媛県では、この紫電改を展示する記念館を既に作って今日に至っている。しかしこの紫電改は日本国内で唯一現存する旧日本海軍の戦闘機であることから、老朽化した既存展示施設の建て替えのため、クラウドファンディングによる資金調達をはかっている。寄付金は既に目標の３８００万円を超えている。紫電改はこの7月25日には、歴史的・文化的に価値の高い航空遺産と認定する「重要航空遺産」に中四国で初めて認定されている。＊この鹿屋海軍基地の司令官はその後、この発見時当時には奈良県大和郡山市に在住していて、本田技研の常務をしていたようである。

2025年(令和7年)6月7日(土)　毎日新聞

現存戦闘機「紫電改」描く

戦後80年

来月から 漫画原画展

引き揚げの地 愛媛で

国内に唯一現存する旧日本海軍の戦闘機がテーマの漫画「紫電改343」の作者、須本壮一さん(61)＝大和郡山市出身＝の原画展が来月から愛媛県愛南町の紫電改展示館で開催される。須本さんは9月に松山市の県庁を訪れ、戦後80年に「紫電改が引き揚げられた」現地で開けてよかった」と戦争と平和を考えるきっかけにしてほしい」とPRした。【広瀬晃子】

紫電改は、太平洋戦争末期に国内の航空機メーカーが開発した戦闘機。敗戦が濃厚となった1944年、本土防衛のため、旧日本軍の精鋭航空部隊が同市で編成されたが、戦闘の約8カ月後に墜落死したとされる。当時の最新鋭機で、約400機が製造されたが現存しているのは4機のみ。うち1機が79年に愛南町の海底から引き揚げられ、80年に開館した展示館で保存されている。残り3機は国の博物館にそれぞれ展示されている。

須本さんは、戦争を題材にした作品が多く、紫電改の精鋭航空部隊が同市で編成されたが、戦闘の約8カ月後に墜落死したとされる。当時の最新鋭機で、約400機が製造されたが現存しているのは4機のみ。うち1機が79年に愛南町の海底から引き揚げられ、80年に開館した展示館で保存されている。残り3機は国の博物館にそれぞれ展示されている。

須本さんは、戦争を題材にした作品が多く、紫電改の搭乗員だった父の影響で、紫電改343の飛行機を初めた20年から漫画雑誌で連載を開始したが、22年に雑誌が休刊になったため、クラウドファンディングで資金を募った。

作者須本さん「平和考える契機に」

漫画「紫電改343」。太平洋戦争末期に製造された戦闘機「紫電改」のパイロットたちを描いた作品だ

漫画「紫電改343」の作者、須本壮一さん　＝松山市の県庁で

オーストリアから

友子さんから暑中見舞いをいただいたのですが、秋季に発行する本件の全国会報誌を借りて返信申し上げます。ウイーンと羽田とを直通する便にて、春の連休を利用され日本へ一時帰国されたのですね。大阪万博や京都など各地を回遊され、その後岡山では後楽園も見物されたのですね。後楽園職員にもお知り合いがおられていて、その方が撮影された写真がオランダの皇室で評価され、撮影されたお友達がオランダ皇室に招待されたとか。大変な外交交流になったこと大変うれしく存じます。

また丸亀では。お友達の山下さまと一緒に阿波の大歩危や金毘羅そして丸亀城を見分されたのですね。

また東京の**美紀**さんから**梅美**会長の死去についても詳しくお聞きされたのですね。まなべ会の名物的人材が黄泉の国へ旅立っていることに、私自身寂しさを禁じえません。私もこの九月で満86歳になりました。来年は日本歴では米寿を迎えることになります。大変驚いている次第です。長生きするなんて若いころ想定していませんでした。小学六年時に母が亡くなったものですから、我欲を規制して生きてきたようです。自然の摂理に任せて生きてゆきたいと今でも思っています。

さりながら昨今の世界情勢や日本の為政者たちの哲学性のない現状に驚嘆しております。地球の自然は人間も動植物もすべてを包含して回転（輪廻）しているのです。至誠と慈悲の無い無機質、利己主義の人たちが地球の摂理に反する行為を行っております。地球がこれ以上燃えないように、節度ある行為をしてもらいたいと思います。我欲な人たちに地球の運命を任せてはいけないと考えています。国連機関が今後地球差配の中心になるのを期待したいと願いたいものです。

ところでこの夏は大変な猛暑続きになりました。世界各地での異常気象は無視できません。大変な状況に至っておりますが、色々お気遣いいただき誠にありがとうございます。ご家族皆様のご健勝を祈念申し上げ、返礼の挨拶とさせていただきます。

不一

國六　拝

赤か青か、二色からの選択

アメリカ昨今の政治家の執政状況を観察してみると大変面白くもあり、また良識人にとって至誠の薄い、しかも教養度の観点からは甚だ希薄な人材の集合体と私は理解するのである。国内の思考形態を観察してみると、お互いが安易に妥協をしない頑固な思想に拘泥していてそこから解放されないのである。国内の思考行動形態が明確な二つの色彩に分割されているのに否応なく関心を寄せざるを得ない。これほどまでに分割されているのは、ただならぬ格差社会が作為的に創出されたのではなかろうか。

この形態に至った推移について、ちょっと過去の歴史を「文明動態的研究」という歴史学手法の観点から見てみたいと思う。このアメリカの現状については多角的総括的に見なければならないと考えるからである。この手法で理解できるのではなかろうか。そもそもアメリカは、当初はヨーロッパからの移民によって誕生している。イギリス、アイルランド、フランス、イタリア、ドイツ等等々であり、中南米はポルトガル、スペインなどである。

西欧から始まった資本主義経済は、現代においては成熟の域に達しており、今や共産主義を唱える中国においてもご都合的に経済分野は資本主義に準拠した経済運営を実行としているのが実情である。想い起せば、アメリカにおいて経済活動が成熟されるにつれて、生産力は上昇し、やがては国内だけの需要を満たして余剰のものが排出されてくる。当然、販売のために外部市場を求めてくることになる。また生活環境は豊かになれば消費が高まり、物価は上昇してくる。後進国においては通常物価は先進国と比較して安いので、生産コストの低いところで生産することが通商上有利である。例えば繊維産業の生産地を考えてみれば、日本においても生産地の変更が幾度も観られていた。韓国、メキシコ、・タイ、ベトナム等々と現地生産工場を国外に変更していた。

ここでアメリカの実情を観察してみよう。共産主義国である中国は人口も多く、大きなマーケットとして捉えていた。日本の頭ごなしにニクソン大統領・キッシンジャーのペアは米中国交正常化を実利的に図ったのである。また、当時の強力国家たるソ連の進出防止のため中国をわが方アメリカへ靡かせるための方策で中国融和政策を樹立させたのである。慌てた日本も田中首相・大平外相ペアによる日中国交回復を急遽進めることになった。おまけにアメリカは中国を後進国としてＯＤＡによる金銭等の援助もし、なおかつ中国人のアメリカ留学を進めていたのである。留学生の中にはカチカチの共産主義者もいたであろう。中国政府はアメリカ留学で成長した学生を、やがて中国本土へ召還し中国発展の礎にしたのである。しかも多大な援助をしたものだから、中国は短期間に強大な経済国・世界生産工場地へ発展することになった。中国は後進国であるという偽装を、つい最近まで上手くしていたようであった。貧しい国民服の下に鎧を隠していたのである。

やがて中国は、世界における工業品の製造基地になり、各国からの工場建設投資と技術が移入され、今では世界第二位の経済大国になるのであるが、如何せん、中国はアメリカが期待していたような理想国家とはならず、独裁覇権国家として成長し、今ではロシアと表面上は連携しながらも、外交政策上ではうまく立ち回っているように思う。

現在のアメリカの為政者は、過去の政策がまずかったと後悔している（？）のか、対中国に対し経済包囲網政策を実行している現状であるが、想えば鉄鋼スチール生産から始まり、各生産競争力においてアメリカは中国や日本などと比較して相対的に低下している現状である。ごく最近では、日本の「日本製鉄」がアメリカの「ＵＳスチール」を買収するなど、また、アメリカ通常車の日本での売り上げ不振現象が観られるが、この原因は、日本の道路条件や日本人の好むデザイン車を提供してこなかった自己責任に起因するものである。然るに他力本願的に「相互関税」という自国第一主義政策を突然実行する通商手段で防御しようとしている。自己都合主義であり、通商主義の自由・柔軟性を阻害するものである。場当たり的で、現時点での友好国であるインドさえも敵対させる関税付与により、逆にインドを中国に接近させるような結果を惹起させている。

かつて通商政策における「ＴＴＰ」方式の形態では、アメリカが中核にて導入提案されたものだが、その誕生行程でアメリカは参加せずに、日本は交渉結実において大変な目にあわされていたのである。この「ＴＴＰ」方式は、最後の最後に、アメリカ側は参加を取り下げているのである。自国第一主義の方向で脱退を通告してきたのである。

これまでアメリカの政治、外交は、二大政党の何れかの人物が政権にたてば、大統領行政府役人の大量退職による大移動が

発生していた。これは民主党と共和党の二大政党の色合いにより、国家政治外交の方向性が突然変更されていたことがよく起こっていた。政府役人の雇用形態では中間色が無いのである。いわば主体性のない二律背反の個人主義の色合いが出ているのである。日本におけるような中間的色彩の人の構成がほぼ見られないのであろう。絵画で例えれば、ぼかし色彩の中間色がアメリカ洋画には少なく、明確な色彩の分割仕分けをするのである。だからキリスト教を深く信仰していても、宗派が違えば相手を受け入れないことになる。いわば他力本願の世界に没入することになる。偶像を信ずるのか、そうでないのか。日本ではお釈迦様を本源としているものが多いが、弘法大師、空海さんでは、自然宇宙の中心にいるのは大日如来である。この大日如来は「**すべて生あるものは救われる**」、という愛情ある深い心を持っているのである。宇宙自然を崇拝する心の広い御仏である。人間と宇宙との共生を崇高し、また宇宙自然界は大きな輪の中で回転しているのである。

いわゆるお釈迦様の手の上で輪廻していると理解されていたのである。その根拠は、空海さんは命を自然界の中に預けて厳しい修行をしていた。命を懸けた自修行から体得した自然の摂理をわかりやすく絵画の「曼荼羅」の中で１０８個の感情を表現している。胎蔵界曼荼羅は修行前の子供の純真さを表現しており、悟りを開いた後の姿は金剛界曼荼羅として表現している。

　空海さんは昔中国に修行しているが二年見当の修行で帰国の途についている。しかも中国の最高知識者である恵果から免許皆伝を得て帰国している。当時最先端を行っていた中国からはもう習うべきものは無いと思ったからである。この事例のようなケースは、明治維新後においても、時の先覚者は西欧文明の何たるかを熟知していたのであろう。当時、経済活動の指針になっていた資本主義経済の将来の到達地点（結果）を、当時の有力知識人は洞察していたと考えられる。その人こそ備中聖人といわれていた「山田方谷」や三島中洲などであると筆者は考えるのである。明治初年ごろには西洋から知識を吸収しようとする人たちが多かった関係で「西洋かぶれ」の弊害を嘆じていた人たちもいた。むしろその当時から日本人の知識人の中には、西欧の文化思想の限界や資本主義社会の限界をも熟知していて、むしろ日本の思想「**自然との共生**」、「**至誠と惻怛**」という人間愛や利他精神そして対自然との共生、共存を重要視する人たちがいた。その中心にいたのが岡山備中を中心とした三角デルタ地域の人たちではなかっただろうか。その一人が二松学舎を創設した三島中洲であった。また経済界においては、一万円札に登場している渋沢栄一なども西洋知識のある中で、儒教の精神を取り上げていて、「論語と算盤」、「道徳経済合一説」を唱えているが、彼はまた岡山備中の人材である阪谷朗廬との交流から確たる理念を体得していたと、筆者は考えるのである。

　現在の資本主義の先端をゆくアメリカの状況を観察してみると、がん細胞化した強欲資本主義に転化しており、当初のキリスト教の愛という思想から甚だ逸脱している現状にある。そして汗を流して働き、他者に愛情を捧げる心も失っているのではなかろうか。実利的に、しかも自国第一主義に邁進する為政者が国際的取り決めを無視する現状では、地球全体が遭遇している諸問題を真剣に考える**慈愛の心を持っているのであろうか**。特に異常気象問題について危惧するのであるが、アメリカは地球温暖化対策の国際的枠組みである「パリ協定」から２０２５年（令和７年）に再離脱するという意思表明をしている（トランプ一期の時にも脱退している）。国際社会の前進取り組みを逆回転させかねないのである。アメリカのラストベルト地帯の白人等のおかれている現状は、アメリカ自身の行動自体から起因するものである。例えば情報サービスの先端を行くＧＡＦＡなどの例を挙げると、最先端で高い収益を得ている会社が存在している反面、デトロイトなどでの旧来の製造会社においては競争力を失っている会社も併存しているのである。金かねの世界で、意図的に社会階層分離を形成してきたのである。強欲資本主義者の人たちは、安易で回転率の高い金融、株式業界の世界の方が利潤が大きいことから地道な製造活動には興味が少ないのである。現今アメリカのＧＡＦＡなどのネット社会の多大な収益の比重がおおきくなり、一方旧体制のベルト工業地帯の衰退は当然の帰結なのである。

　アメリカ国内産業の国際競争力のアンバランス是正は、自国において国家補助政策や税負担率の変更など富の分配政策変更を作為的にやればよいことである。国内事情であるのに、他国に対し唐突に相互関税を付加するものであってはならないのである。

　アメリカではおおよそ**三億四千万人前後の人口を擁しているが、このような変人が最終的にトップに選任されているのが不思議**でならない。現代の情報化時代にあっては、ＳＮＳなどの手段によって大衆受けする作為的ニュース、フェイクニュース（偽情報）も発信され、収れん

された偶像ができあがる。また、マスコミで司会などをしている人物の場合では、馴染みの人物や弁舌で大衆が親近感受けする人物も登場している。例えば、日本国内においても民放のアナウンサー、タレント芸能人、庶民受けする女優などが組織の長などの選挙に立候補して当選している。有力国会議員の後ろ盾をもらい政治の世界に進出してくるケースが多くなってきた。**国民の主体的思考の幼稚化現象**が観られるようになってきている。ＳＮＳという情報網の操作による偽情報発信の真偽判定が困難になり困った状況になってきた。トランプ大統領の場合も以前よくテレビの世界に登場していたのではなかろうか。

　今回アメリカにおいて、前政権と違って真逆な方向に進んでいる現状をわたしどもは目にすることになった。赤か青かの二色の選択に拘泥せずに、第三極の色分けできる党組織があれば、もっと自由で柔軟な色彩が鑑賞できるのではなかろうか。

　地球上の、とある一角から発生した大きなうねりの波は、穏やかな海を荒波の海に変えてしまうだろう。世界は、今年から大きな波に翻弄されることになり、日本においてもその渦に巻きこまれることになる。

　アメリカにおける極端な方向転換は短絡で、これまでの自由な過当競争は弱肉強食の世界を現出し、しかも宇宙をも征服しようとするのである。環境破壊もなんのその、掘って掘って掘りまくれ。あまりにも理不尽な行為に神経も休まらない世界から脱して、癒しを感じる日本の風景と食べ物に魅了され多くの外国人が来るのであろう。

　世界の人たちは、日本人が目標とする利他精神に理解を寄せ、地球に降り注いでいる諸々の苦難解消のため慈愛をもって利他精神を発露したいと思っても不思議でない。

　この困難な状況の中で日本の為政者は日本の美しい自然の姿を国際社会の中で説明できるのであろうか。自身と誇りをもって主導せねばならない。

國六　記

父が創造した記念碑の行く末に想いを寄せて

真鍋　祥子

　わたし達「全国まなべ会」会員の総力を結集して、平成四年十月四日に真鍋島で「まなべの碑」と「千人碑」が建設されました。

　わたしの父真鍋重治は同族の「まなべ」に対して深い思いと誇りを持っていました。私はその娘の長女である**祥子**と申します。父**重治**は真鍋島に建設された記念碑にあやかって、同様の記念碑を自宅に建設しました。その心意気と建設、完工に至るまでの苦労を私は近くに住まっていたので見てまいりました。私も感化され、「まなべ同族」一連の事業活動に父同様に心酔してまいりました。

　その後父は黄泉の国へ旅立ち、時代は流転してまいりました。私の想い出深かった里の家も、この度取り壊しとなりました。その庭には父が尋常ならざる情熱を持って丹念に造作した「まなべの記念碑」があるではありませんか。青空の下で寂しそうに放置された記念碑を前にして一瞬放心してしまいました。記念碑をどうにかしたい一念で抱き抱えたくなりました。私も父の思いと一緒なのだと感じました。しかし現状ではどうこうする時間余裕もありません。移動さすには大変なことゆえ困惑いたしました。何も手を施せないのが残念であります。

　そこで友人の東京まなべ会事務局長の**真鍋美紀**さんと相談して来宅していただきました。**美紀**さんは現状の記念碑などの写真を撮影したりして心を落ち着かせていました。本部の広報部長さんへ連絡して今の気持ちや現状を文章にして残してはいかがでしょうか、との結論に至りました。広報部の**國六**さんよろしくお願いいたします。父、**重治**の思いの強かった記念碑の遺産を糧にして広報誌に掲載できないでしょうか。そうすることが父や建設に関わった人たちの神髄に私の気持ちが通ずるのではと思うのです。全国まなべ会会報誌の掲載記事でもって、私の歩んできた想い出の保存記録にしたいと存じます。

　かような趣旨の依頼を**祥子**さんと**美紀**さんから頂きました。

　祥子さんの父は、全国まなべ会第三代目の会長をされていた方です。阿波の美馬市美馬町のご出身の方でした。美馬町にも真鍋の史跡痕跡を残されております。

　このような信念のある立派な先輩がいたのを誇りとするものであります。会報誌づくりは予算やページ数の兼ね合いもありますが急遽取り上げたく、今回の第70号に記載したい気持ちになりました。

　ところで東京の武蔵村山市にも、真鍋島の千人碑公園の碑文を模した記念碑を造っていた人物がいらしたことにいやはやまったく驚いている次第です。

國六　記

（参考）

＊石碑表面

まなべ氏由来記

真鍋島の古伝に謂わく、まなべ氏の遠祖は、肇国の神武東征軍に加わるも、高島宮より出師の砌り急疾のため残留、爾後まなべに駐りて周辺諸島の開拓に努めた。

降りて神功皇后三韓征旅の途次、備中二子山に於て双子を出産、その次子を残してまなべ氏を嗣しめたとある。

真鍋島は瀬戸内海船運の要衝にて四辺は魚介類の宝庫なれば、これらを捕りて大和朝廷に貢納す、朝廷これを賞でて「真魚部」の姓を賜う。爾来、この島も『真魚部の島』と呼ばれるようになった。

奈良朝に至り、地名等は漢字二文字制にと更改され、「真魚部の島」は「真鍋島」となり、何時しか「真魚部氏」も「真鍋氏」へと転化した。

抱き茗荷

真鍋島の地図石面

＊石碑裏面

記念碑建立之記

全国まなべ会は、備中真鍋島の地を発祥とする。

真鍋、真部、真辺、間鍋、間部、曲直部、等の諸氏凡そ四万を超ゆる一族一門を結集し、祖先を崇拝しその系譜実績を調査研究、これを子孫に伝えると共に同族の融和と親睦を図るを目的として、**真鍋藤治**氏の提唱により昭和五十六年八月、全国の有志真鍋島に集い創立発足した。

爾来毎年各地で全国大会を開催、一族の団結の輪を拡げ、現在十四都道府県に地区まなべ会を結成、近く十地区にもまなべ会が誕生の情勢である。

このたび結成十周年を記念して全国まなべ会の輝かしい活動を、後世子々孫々に継承すべく全国会員の総力を結集「まなべ之碑」と「千人碑」を建立した。

まなべの姓に誇りを持つ一族の永遠の繁栄を祈るものである。

平成四年十月四日

全国まなべ会一同

左側 祥子さん　右側 美紀さん

サステナアイランド　真鍋島
～生態系と共に歩む体験～

この表題のパンフレットが岡山の友人からこの九月十日に送られてきた。友人は「山田方谷」研究の権威者であり、地域創生に関心のあるお方である。わたしも山田方谷に関心を持っており、その関係で先駆者たるこの友人から勉強をさせていただいている。一方、私の方は「全国まなべ会」のPRをしたりして交流をしているのである。

今回まなべ島で表題の件で「ジビエ体験ツアー」が開催されるというニュースのパンフレットが郵送されてきた。他の人が、まなべ会活動へ関心を持たれて資料を送付いただいたことに大変ありがたく思うものであり、感謝を申し上げたいと存じます。

ところで、この二十数年前からイノシシが人間近くの領域にまで侵入していることは、讃岐の阿讃山脈の山裾に出没し畑の作物を食べ散らしている、と嘆いていた職場の同僚がいたから知っていたのである。ただ真鍋島へ神出鬼没していることは一大事であると心配するものである。その理由は何なのか甚だ興味を持つのであるが、真鍋島の植生に関心がある。穀物のイモ類などと共に、たんぱく質の物は如何であろうか。里の甥御の言によれば、マムシや蛇を好んで食べているとか言っていた。さすれば瀬戸内の島々にはマムシが多いとか聞いているので、真鍋島でもそうであろうかと推察するのである。マムシがおらなくなれば千人碑への参拝も一安心と思う一方、今度はスズメバチの件を心配するのである。白い服装や強い匂いの物を避けると良いのであろうか。

さて最近の自然環境の悪化による人間と怖い動物との出会いは、人間が作っているともいえるのではなかろうか。両者が共生できる環境を創出せねばならないのであるが、何分地方における人口の流失、世代交代などで減少が大きいことから、田畑や山林の手入れができないのである。中山間地域の生活環境の劣化に関心が寄せられている。人の身体で申せば、血流は細い毛細血管が詰まりやすくて、やがて次の段階へ進んでゆき、最後は目や足の先端の細胞血管の詰まりに至る。言わば糖尿病の進展によく似ているのである。社会環境の劣化も同様であろうか。

今回真鍋島においてイノシシを捕獲して、その肉を食するという計画を立てられているのは、多くのイノシシを捕獲して人間生活とのバランスを図ることでもあり、全ての環境はバランスの良い均衡であってほしいと願うものである。瀬戸内の島で現状の改革行為は、地方から中央への情報発信にもなり首肯できるのである。

現今の経済活動の様子を観察すれば、一方で社会環境の変化も注視せねばならない程アンバランスになっているのである。今後、経済学と社会学は表裏一体のものとして観察せねばならないことになろう。

ここで思うに、かつての岡山備中松山藩の偉大な改革先導者たる山田方谷が言う「事の外」という大局観、鳥瞰の目が、今後日本国民全体の大きな行動指針の言葉になるのではなかろうか、否なってほしいと切に思うのである。

國六　記

新入会員のお知らせ

新入会おめでとうございます。今後ともよろしく交流いただきたいと存じます。

北海道まなべ会　一般　**眞鍋　等**
東　京まなべ会　一般　**真鍋祥子**
神奈川まなべ会　理　事　**真鍋大樹**
近　江まなべ会　評議員　**眞鍋榮子**

お悔み情報

謹んでお悔やみ申し上げますとともに、長年にわたってのご支援に対し厚くお礼を申し上げます。

本部役員一同

伊予まなべ会　評議員　**眞鍋光昌**

＊全国役員の方がご逝去の折には何卒本部事務局へご一報をお寄せください。

令和６年度一般会計決算

単位：円　　自　令和６年４月１日　至　令和７年３月31日

収入 摘要	予算	実績	支出 摘要	予算	実績
年会費			各地区補助金	60,000	62,000
（全国役員）	@5,000×48	@5,000×47	全国大会補助金	300,000	300,000
	240,000	235,000	総会準備金	10,000	7,040
	@3,000×60	@3,000×58	財政部費	(82,000)	(69,325)
	180,000	174,000	・振替口座料	42,000	33,624
	@1,000×85	@1,000×96	・事務・通信費	30,000	29,717
会報助成金	85,000	96,000	・会費振込票印刷費	10,000	5,984
			広報部費	(435,000)	(360,570)
（一般会員）			・会報（67.68号）	350,000	297,495
計	505,000	505,000	・郵送料	60,000	33,189
			・編集費	10,000	20,255
広告費	0	0	・インターネット維持費	13,000	8,406
			・雑費	5,000	1,225
			郵貯口座入金	通知料 10,000	(9,680)
寄付金	20,000	20,000	調査研究部費		
			女性部費		
雑収入	2,500	13,900	事務局費	(59,000)	(101,024)
			・事務費	14,000	38,444
			・慶弔費	10,000	34,380
貯金利子	10	216	・まなべ会栄誉賞	0	
郵貯残金		1,737	・まなべ会功労賞	0	
未収金戻入	6,045	320	・感謝状作成費	0	
			・長寿記念品代	25,000	26,000
			・封筒作成費	5,000	
			・雑費	5,000	2,200
			税金（相続税）		
			全国本部役員会費	25,000	58,190
			記念碑特別会計補助	0	
小計	533,555	541,173	小計	981,000	967,829
前期繰越金	1,812,574	1,812,574	次期繰越金	1,365,129	1,385,918
合計	2,346,129	2,353,747	合計	2,346,129	2,353,747

次期繰越金明細は普通貯金

郵貯残金	1,737円		
事務局長通帳	58,359円		
國六財政部長通帳	325,106円	振替手数料	33,624 円
國六財政部長定額貯金	1,000,000円	局からの通知料	9,680 円
小計	1,385,202円	合計	43,304 円
＋現金	716円		
合計	1,385,918円		

令和７年度一般会計予算

単位：円　　自　令和７年４月１日　至　令和８年３月31日

収入 摘要	予算	支出 摘要	金額	小計
		各地区補助金	60,000	
年会費		全国大会補助金	200,000	
@5,000×45	=225,000	総会準備金	10,000	
@3,000× 58	=174,000	（議案書・役員名簿）		
会報助成金	小計(399,000)	財政部費	(70,000)	(70,000)
@1,000×95=	95,000	・振替口座料	33,000	
	小計(95,000)	・事務・通信費	31,000	
	合計(494,000)	・会費振込票印刷費	6,000	
		広報部費	(367,000)	(367,000)
		・会報（69,70号）	300,000	
広告費	0	・郵送料	35,000	
		・編集費	20,000	
寄付金	20,000	・インターネット維持費	10,000	
		・雑費	2,000	
雑収入	13,000	郵貯口座入金	10,000	(10,000)
		調査研究部費	0	
貯金利子	200	女性部費	0	
		事務局費	(78,000)	(78,000)
未収金戻入	1,000	・事務費	40,000	
		・慶弔費	20,000	
		・まなべ会功労賞		
		・まなべ会栄誉賞		
		・感謝状作成費		
		・長寿記念品代	10,000	
		・封筒作成費	5,000	
		・雑費	3,000	
		全国本部役員会費	50,000	
		記念碑特別会計補助		
小計	528,200	小計	765,000	765,000
前期繰越金	1,385,418	次期繰越	1,148,618	
合計	1,913,618	合計	1,913,618	

注1：予算執行に際して各項目間の流用を認めるものとする。

令和６年度記念碑特別会計決算

単位：円　　自　令和６年４月１日　至　令和７年３月31日

収入 摘要	実績	支出 摘要	実績
一般会計よりの助成		五稜郭公園保守管理費 注:1	0
		千人碑建立代金	
千人碑申込金（仮受金）		代金払込手数料	
貯金利子(定額)			
貯金利子(普通)	24		
小計	24	小計	0
前期繰越金	2,006,808	次期繰越金	2,006,832
合計	2,006,832	合計	2,006,832

注1: 保守管理費は管理の実体不明につき今年度計上していない　実体把握が必要である。

次期繰越金(残高)明細　定額貯金　1,840,000円　合計　2,006,832円
通常貯金　166,832円

令和６年度継志舘会計決算

単位：円　　自　令和６年４月１日　至　令和７年３月31日

収入 摘要	実績	支出 摘要	実績
貯金利子	54		0
小計	54	小計	0
前期繰越金	1,399,904	次期繰越金	1,399,958
合計	1,399,958	合計	1,399,958

次期繰越金(残高)明細　定額貯金　1,000,000円　合計　1,399,958円
通常貯金　399,958円

令和６年度事業報告

1. 第41回阿波大会が令和6年5月26日(日)，阿波まなべ会担当にて盛大に開催されました。
2. 会報第67号(1,100部)，68号(1,100部)をそれぞれ発行致しました。
3. 全国まなべ会役員会申合わせによる各地区まなべ会宛の補助金を令和7年1月30日付にて振込みました。
   振込み総額は62,000円。(参考，前年度は61,600円)
4. 令和6年5月1日付にて全国役員名簿を発行，全国役員全員に配布。
   令和7年5月1日,名簿変更箇所は議案書に掲載
5. まなべ島五稜郭公園の保守管理契約に基づく清掃作業を実施。
6. 長寿賞(1944年生)方5名に記念品を送付しました。
7. 会長不在地区に、会長選出の依頼の書面を送付しました
8. 全国役員会　令和7年2月8日
   全国大会開催地新居浜で開催しました。
   國六財政部長、晴夫組織部長、隆総務部長、澄夫事務局長出席
9. 全国まなべ会のホームページを閲覧し、全国会への入会希望連絡があり、3名の方にまなべ会概要、会報・・・・送付しました。
10. 令和7年5月1日現在，全国顧問，理事，評議員等全国役員は133名と当会運営の基礎を維持致しております。

ニュースの泉

千足神社のある関川公民館(四国中央市)でこの７月１日発行の公民館会報に、まなべ会参拝のニュースが取り上げられています。

千足神社での演奏に皆様大感激。真鍋さんと声掛けすると皆様一斉に振り向いてくれたとかくれないとか。

（令和7年７月1日発行）
館報せき川第485号より

【お知らせ】

来年度の第43回全国まなべ会大会は、関東埼玉大会として実施されます。
概要は下記のとおりですが、内容確定すれば来年春の第71号会報誌で詳細お知らせします。

第43回 全国まなべ会 関東埼玉大会

日時 / 令和８年５月23日(土)・５月24日(日)

会場 / ザ マークグランドホテル　〒330-0081 埼玉県さいたま市中央区新都心3-2
TEL：048-601-1111（代表）
※さいたま新都心駅から徒歩８分

第1日　5月23日（土）ザ マークグランドホテル

13：00～ 5 ：30　受付
14：00～15：30　全国役員会
15：30～16：30　総会
16：00～17：00　記念講演（詳細未定）
17：00～17：20　（休憩）
17：20～17：35　記念撮影
17：35～18：30　（休憩・入浴）
18：30～21：00　懇親会
（詳細未定＝出演者を今後募る）
21：00～　二次会（希望者）

第2日5月24日（日） 東京観光

ホテル発⇒東京大学本郷キャンパス（見学）⇒
三州家（昼食）⇒　東京スカイツリー（観光・買い物）
⇒　浜離宮（見学）⇒　東京駅着（解散）

編集後記

この夏は、昨夏に比べても一段と熱い毎日に遭遇している。誰かが「地球は燃えている」と言われたのであるが、真に的を射た表現であります。わたし達の住んでいる地球が大変な状況になっているのに、あちこちで戦争を起こし、またこの機に石油をジャンジャン掘り出すのだと豪語する非教養人ブローカーが政をしているのに唖然とするのであります。

国内においても今年は気温が観測史上最高値の40.8度記録したところがありました。この調子では、来年も新記録の年になるのではなかろうか。このところの猛暑日続きにより、会報誌づくりに筆も進まず、四苦八苦している状態であります。記録写真をふんだんに掲載すればよいのですが、スマホ写真の出来映えも悪く利用できず、勢い文章多発の現状であります。

さて今年は、アメリカ大統領にトランプ氏が再登場しました。早速対外的政策として相互関税手法の政策乱用などを実行しています。このため関係各国に懸念材料を与えております。そもそもアメリカの自己利益主義は過去においても実行しております。日本人の特色である利他精神、協調精神のひとかけらでも有ったらよいのですが、欧米の二者択一法では解決できません。強いもの勝ちで、ロシアやイスラエルのやり方を見れば理解できるのではなかろうか。

現在日本政府はインドからアフリカにかけて大いなる親交政策を前向きに採用し始めているようですが、どのような成り行きになるのでしょうか。一方わたし達は、立派な人物である「山田方谷」の至誠惻怛の思想を根底に会報誌づくりを進めている思いであります。わたしどもの会報誌づくりは関係各位の幸せづくりのために奮闘しているのですが、如何せん内容は理屈っぽいものになりました。今後とも皆様方の情報のご提供をお願いしまして編集の報告とさせていただきます。　國六　記